

国内実地調査報告 1

観光の場としての卸売市場 —東京都中央卸売市場の2事例から

中村学園大学 流通科学部

浅岡由美

1. はじめに

本稿は、東京都中央卸売市場の豊洲市場、大田市場の2つの事例調査から、観光の場としての卸売市場を報告するものである。中村学園大学流通科学研究所の国内調査において、2023年2月27日に豊洲市場を、28日に大田市場を訪問した。

観光資源とは、公益財団法人日本交通公社によれば「人々の観光活動のために利用可能なものであり、観光活動がもたらす感動の源泉となり得るもの、人々を誘引する源泉となり得るもののうち、観光活動の対象として認識されているもの」と定義される〔1〕。近年、観光者のニーズは多様化し、「産業観光」「社寺観光」などの「〇〇観光」、あるいは「サステナブル・ツーリズム」「グリーン・ツーリズム」「アニメツーリズム」などの「〇〇ツーリズム」のようにニューツーリズム、テーマ別観光の種類の増加をもたらしている。このようなニューツーリズムやテーマ別観光は複数に分類されるものもあるものの、表1のように分類、整理ができよう。

観光の場としての卸売市場は、水産物、青果物、食肉、花きなどの流通を対象とする産業観光や社会学習の場となりえるが、インバウンドにとっては日本人や日本社会の生活・文化に触れる体験の場になるであろう。当該地域と異なる地域に居住する日本人も同様に、未知の生活・文化への接触を期待している。

卸売市場では、見学や学習にショッピング、飲食といった目的も加わることから、観光者、見学者、学習者、消費者などが訪問者となり、その国籍、年齢、性別、属性は多岐にわたる。

2. 市場で働く人々と、その役割

まず、観光の場としての卸売市場を理解するために、市場のしくみとして市場で働く人々と、その役割について簡単に触れたい〔2〕。

卸売業者は、出荷者から品物を集荷し、市場内の卸売場で、セリ・相対取引などを行って仲卸業者や売買参加者に販売する。卸売業者として東京都中央卸売市場で営業するためには、東京都知事の許可が必要である。

表1 ニューツーリズム・テーマ別観光の類型化

分類	例
①理念によるもの	サステナブル・ツーリズム、エコツーリズム、スロー・ツーリズムなど
②資源によるもの	グリーン・ツーリズム、ブルー・ツーリズム、フード・ツーリズム、フード・トレイル、アグリ・ツーリズム、フラワーツーリズム、産業観光、文化観光、社寺観光など
③目的によるもの	ヘルスツーリズム、メンタルヘルスツーリズム、スポーツツーリズム、産業観光、文化観光など
④観光手段によるもの	サイクルツーリズム、オルレ、フットパスなど
⑤訪問する場所や期間によるもの	ルーラル・ツーリズム、フィルムツーリズム、アニメツーリズム、ダークツーリズム、ロングステイなど

仲卸業者は、卸売業者から買った品物を、市場内にある仲卸店舗で、小売業者や飲食店など市場に買出しにくる人たち（買出人）に販売する。仲卸業者として東京都中央卸売市場で営業するためには、東京都知事の許可が必要である。

関連事業者は、買出人を中心とする市場利用者のために業務を営む人である。海苔・乾物などの関連食料品や、包丁・鍋といった調理道具、買出しに使うカゴ・長靴などの用品の販売や飲食業、運送業など業務の種類は多岐にわたる。関連事業者として東京都中央卸売市場で営業するためには、東京都知事の許可が必要である。

売買参加者は、東京都知事の承認を受けて、仲卸業者と同様に卸売業者から直接、セリ・相対取引によって品物を買う業者である。小売業者や食品加工業者、地方卸売市場者などで、売買参加者には仲卸業者と同様の評価機能と分荷機能が求められる。

買出人は、まちの自分の店で扱う品物を仲卸売業者から仕入れて、小売店や飲食店などで消費者に提供する人である。これら買出人の数は全市場で数万人に達するとみられ、その範囲は都内、周辺各県に限らず、東北・北海道・関西地方にまで及んでいる。

3. 豊洲市場

(1) 概要

豊洲市場は、東京都江東区豊洲六丁目に立地している。最寄駅は、ゆりかもめの市場前駅である。

豊洲市場の特徴、4つのポイントを豊洲市場のパンフレット〔3〕にもとづき、見学エリアを豊洲市場のホームページ〔4〕を参考に記す。

豊洲市場は、2018（平成30）年10月11日に開場した。築地市場が果たしてきた豊富で新鮮な生鮮食料品流通の円滑化と価格の安定という機能に加え、50年先まで見据えた首都圏の基幹市場として、消費者の意識が高まっている食の安全・安心の確保、効率的な物流の実現など、産

地や顧客・消費者の様々なニーズにも対応しようとしている。さらに、環境に配慮した先進的な市場とするとともに、築地市場の築いてきた歴史と伝統を継承・発展させていくことで、豊洲市場の魅力＝ブランド力を高めていくことを目指している。

4つのポイントは、1）食の安全・安心の確保、2）省エネに取り組み、環境に配慮、3）効率的な物流の実現と新たなニーズへの対応、4）地域と連携した活気ににぎわいの創出、である。

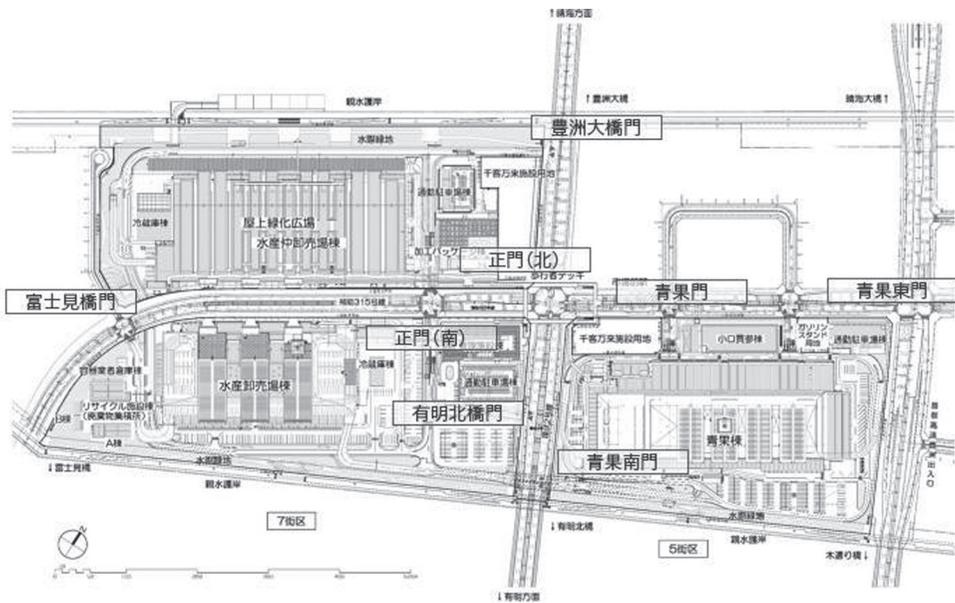
(2) 3つの街区と見学エリア

豊洲市場は、日祝日、休市日を除く午前5時から午後5時まで開場している。取り扱う生鮮食料品や市場での役割に応じて、3つの街区（5街区、6街区、7街区）により構成されている。5街区は青果棟、6街区は水産仲卸売場棟、7街区は水産卸売場棟である（図1）。

5街区の青果棟には、国内外の野菜や果物を集めて取引を行う卸売場と飲食店や、まちの八百屋さんなどが品物を仕入れに来る仲卸売場がある。2階部分に1階の仲卸売場を眺望できる見学者通路がある。ここから仲卸売場で行き交うターレや並べられた野菜、果物が見え、活気を感じることができる。長い廊下の先には見学者デッキがあり、午前6時半ごろから始まる季節の野菜をセリにかける促成セリ（早朝セリ）場などを見学できる見学者デッキがある。ここでは、旬の野菜、果物の情報をパネル展示している。

6街区の水産仲卸売場棟は、まちの魚屋さんやお寿司屋さんなどが水産物を仕入れに来る場所である。3階が見学ギャラリー、4階が物販エリアとなっており、ターレの実物が展示されていたり、築地市場時代に入荷した最大のクロマガロの等身大（288cm）のパネルが設置されていたりしている（図2）が、見学ギャラリーと一部の物販エリア以外は観光エリアではないため入場はできない。屋上の緑化広場からは臨海部

観光の場としての卸売市場—東京都中央卸売市場の2事例から



豊洲市場 配置図

図1 豊洲市場の施設概要〔2〕



図2 クロマグロのパネル
(筆者撮影)



図3 クロマグロのオブジェ
(筆者撮影)

や東京タワーなどが一望できる。

7街区の水産卸売場棟は、国内外からの水産物を集め、取引を行う場所であるが、2階の見学者デッキから自由に見学ができる。ここでは、

クロマグロのオブジェ(図3)が観光客を出迎える。このエリアでは、さまざまなデータパネルにより、豊洲市場の流通やマグロについて学ぶことができる。午前5時半から6時半には、セリ場のライブ音声が流れ、セリ開始を告げる鐘の音、活気あるセリのを聞きながら見学ができる。通路には、マグロのセリで使う「手やり」の紹介があるほか、江戸時代からの市場の歴史がパネルで展示されている。マグロのセリ場を抜けると、鮮魚売場を一望できるスペース



図4・5 市場や魚の説明パネル（筆者撮影）



図6・7 見学者デッキから見るマグロのセリ場（筆者撮影）

がある。

また、事前のインターネットによる申込を要し抽選制ではあるが、マグロ卸売場内の一角から、100名に限り午前5時45分から6時25分まで、臨場感あふれるマグロのセリが見学できる。

7街区には管理施設棟もあり、東京都や各事業者の事務所をはじめ、都のPRコーナーや飲食店などがある。豊洲市場を紹介するホームページでは、英語表記もあり、インバウンドに対応している。

（3）ショッピング・飲食エリア

一般の来場者がショッピング可能な物販エリアとして6街区、水産仲卸売場棟の4階を中心に、約70軒の専門事業者が営業する「魚がし横丁」がある。本来は、市場で働く人々や早朝に買い出しに来る魚屋さんやプロの料理人が立ち

寄るプロショップであるため、早朝はプロ向けに営業を行い、その後、一般来場者に対応、お昼過ぎには閉店してしまう店舗も多い。

加工食品取扱店舗では、珍味、漬物、促成野菜、つま物、わさび、乾物、玉子焼き、海苔、お茶、調味料、酒、チーズなどのさまざまな食品を取り扱っている。用品類取扱店舗では、包丁、料理道具、包装資材、長靴、はかり、漁具、衣料などが販売されており、お土産としても人気がある。

飲食エリアは、青果棟（5街区）に4店舗、水産仲卸売場棟（6街区）に22店舗、管理施設棟（7街区）に13店舗がある。寿司、天ぷら、うなぎ、そば、中華、洋食、カレーなどさまざまな店舗があり、来場者のニーズに応じている。

（4）インタビュー調査

東京都水産物卸売業者協会の浦和栄助氏及び



図8 ショッピングエリアの看板
(筆者撮影)



図9 和食店舗
(筆者撮影)

東京都保健福祉局市場衛生検査所の酒井昭壽氏に実施したインタビュー調査の内容は、以下のとおりである。お二人には、ここに記して感謝申し上げたい。

①見学者

コロナ前から中国からの観光客が多く訪れていた。コロナ禍にはインバウンドの来場者はほとんどなかったが、現在は増えてきており、日本人と比較するとインバウンドが目立っている印象である(浦和氏)。

2019(令和元)年の見学者数は414,000人であった。子どもから高齢者まで幅広く訪れているが、インバウンドの観光客が目立つ。まぐろのセリを目的に訪れる観光客が多いが、都内や近隣の小学生の社会科見学では産地や卸売の機能を学んでいる。修学旅行客も多い(酒井氏)。

②見学施設、見学コースを設けるねらい

卸売業者、仲卸売業者ほか、売買参加者などのプロフェッショナルと見学者を区分けすることが、ねらいである(浦和氏)。

一般論として、生鮮食品等の流通に関して、中央市場のもつ機能や役割、現場の理解を深めていただくことが目的であったと聞いている(酒井氏)。

③観光につながる付帯設備やイベント

卸売市場内でもショッピングや飲食が可能であるが、場外マルシェを実施、2024年には「豊洲市場 千客万来」がオープン予定である。一般の方々へ市場の存在を認知いただくなど普及啓発を行っている(酒井氏)。

場外マルシェと「豊洲市場 千客万来」について補足を行う。

市場の歩行者デッキから直結する4街区「ミチノテラス豊洲」において、毎月第3土曜日に「豊洲場外マルシェ」が開催される。市場内のマグロ専門店のマグロや海鮮、青果物などが販売されるほか、毎月、趣向を凝らしたイベント、たとえば、キッチンカーの出店、三陸の海の幸の販売、日本酒の酒蔵の出店などが企画されている〔4〕。

「豊洲市場 千客万来」は、全国に総合温浴施設を展開する万葉倶楽部株式会社が事業者となり、2024年2月1日に開業する。商業棟「豊洲場外江戸前市場(仮称)、地上3階、地下1階、延床面積14,690.63㎡」と温浴棟「東京豊洲万葉倶楽部(仮称)、地上9階、地下1階、延床面積19,095.73㎡」を設置する。温浴棟では、専用トレーラーを用い、箱根・湯河原温泉の湯を運搬する〔5〕。

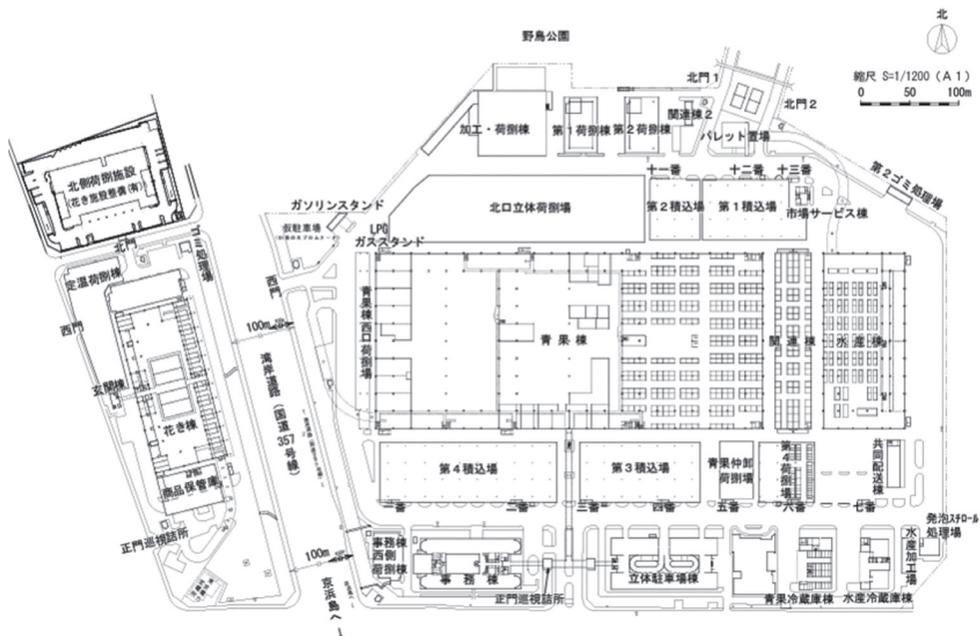


図10 大田市場の施設概要〔6〕

4. 大田市場

(1) 概要

大田市場は、大田区東海三丁目に立地している。京急バスや都バス「大田市場」で下車する。大田市場のパンフレット〔6〕を参考に概要を記す。

1981（昭和56）年度に策定された第三次東京都卸売市場整備計画にもとづいて、青果・水産・花きを取り扱う総合市場として建設された。日本最大級の敷地面積（386,426㎡）を有し、特に、青果、花きは施設の規模、取扱量ともに日本最大の市場であり、全国の建値市場としての役割を果たし、供給圏は東日本全域に及んでいる。また、見学者のための展示室や見学コースが設けられ、都民が親しめる市場となっている。

(2) 見学

見学は5：00～15:00に可能である。事務棟2階に展示室があるほか、青果棟の2階を周回するように見学コースが設けられている。

(3) ショッピング・飲食エリア

不定期に開催される市場祭りのほか、一般来場者が、買物可能な一部の店舗がある。飲食店は、関連棟の1階、事務棟の2階、花き棟の2階に



図11 見学コースからのぞむセリ場（筆者撮影）



図12 豊洲市場での案内板
(筆者撮影)

あり、一般来場者が利用可能である。しかし、大田市場にショッピングや飲食を主目的で訪れる来場者はそう多くないとのことであった。

5. むすびに

卸売市場法によれば、卸売市場とは、生鮮食料品等の卸売のために開設される市場であって、卸売場、自動車駐車場その他の生鮮食料品等の取引及び荷さばきに必要な施設を設けて継続して開場されるものとされている〔7〕。我々の毎日の生活に欠かすことのできない生鮮食料品等を円滑かつ安定的に供給する流通拠点であり、国内外から大量、多品種の品物を集め、公正かつ迅速な取引により、消費者の食生活と豊かな暮らしを支える場である〔8〕。杉村(2017)が記すように本来、卸売市場は「基本的には観光客はもちろんのこと、最終消費者とも直接的には無関係な存在である〔9〕」。

移転前の築地市場では、一般来場者が入場できないエリアに言葉の壁もあり、外国人が入ってきてトラブルとなったケースが多々あったようである。本来の目的を円滑に遂行し、衛生面と、観光客などの安全を確保するためには、豊洲市場、大田市場のように見学者デッキや見学者コースを設け、両者を区別することが必要であろう。

豊洲市場において、飲食目的の観光客のニーズは満たすことができると考えるが、生鮮のショッピングに関しては、場所と時間が限られ

観光の場としての卸売市場—東京都中央卸売市場の2事例から
ていることもあり、場外マルシェや築地場外市場のほうが、自由度が高く利便性や快適性が高いのではないだろうか。豊洲市場は、地域と連携した活気とにぎわいの創出を目的の一つに掲げている。4街区「ミチノテラス豊洲」や新たに開業する「豊洲市場 千客万来」により、ショッピングと飲食が充実することであろう。豊洲市場があるからこそ、近隣の市場や施設が観光、ショッピング、飲食の場の意味を持つ。豊洲に行けば鮮度、品質がよく、品揃え、価格の優位な生鮮や関連商品が入手でき、飲食を楽しめる場所として、消費者が想起できることが望まれる。

【引用・参考文献、ホームページ】(サイトはすべて、2023年11月20日に確認した。)

- [1] 公益財団法人日本交通公社
<https://www.jtb.or.jp/research/tourism-resource-list/>
- [2] 東京都中央卸売市場
<https://www.shijou.metro.tokyo.lg.jp/>
- [3] 東京都中央卸売市場豊洲市場『豊洲市場概要 令和4年版』
- [4] The 豊洲市場
<https://www.toyosu-market.or.jp/>
- [5] 万葉倶楽部グループ
<https://www.manyo.co.jp/toyosu-leasing230209/>
- [6] 東京都中央卸売市場(2022)『大田市場概要』
- [7] 卸売市場法
https://www.maff.go.jp/j/shokusan/sijyo/info/pdf/250614_sijouhou.pdf
- [8] 東京都中央卸売市場(2022)『市場のしおり 東京都中央卸売市場概要』
- [9] 杉村泰彦(2017)「卸売市場における観光事業の展開とその意義」『オホーツク産業経営論集』第25巻第1・2合併号